

坂口安吾

風と光と二十の私と





風と光と二十の私と



私は放校されたり、落第したり、中学を卒業したのは二十の年であつた。十八のとき父が死んで、残されたのは借金だけということが分つて、私達は長屋へ住むようになつた。お前みたいな学業きらの嫌いな奴やつが大学などへ入学しても仕方がなからう、という周囲の説で、もつとも別に大学へ入学するなという命令ではなかつたけれども、もつともな話であるから、私は働くことにした。小学校の代用教員になつたのである。

私は性来放縦ほうじゆうで、人の命令に服すということが性格的にできない。私は幼稚園ようちえんの時からサボることを覚えたもので、中学の頃ころは出席日数の半分はサボった。教科書などは学校の机の中へ入れたまま、手ぶらで通学して休んでいたので、休んで映画を見るとか、そんなわけではない。故郷の中学では浜はまの砂丘さきゆうの松林まつばやしにねころんで海と空をボンヤリ眺めながめていただけで、別段、小説などを読んでいたわけでもない。全然ムダなことをしていたので、これは私の生涯しょうがいの宿命だ。田舎いなかの中学を追いだされて、東京の不良少年の集る中学へ入学して、そこでも私が欠

席の筆頭であったが、やっぱり映画を見に行くなどということは稀まれで、学校の裏の墓地や雑司ぞうしヶ谷やの墓地の奥おくの囚人墓地しゅうじんという木立にかこまれた一段歩たんぶほどの草原でねころんでいた。私がここにねころんでいるのはいつものことで、学校をサボる私の仲間はこちらへ私を探しにきたものだ。Sというところ有名なボクサーが同級生で、学校を休んで拳闘けんとうのグラブをもってやってきて、この草原で拳闘の練習をしたこともあるが、私は当時から胃が弱くて、胃をやられると一ぺんにノビてしまうので、拳闘はやらなかった。この草原の木の陰かげは湿地しっちで蛇へびが多い

のでボクサーは蛇をつかまえて売ると云<sup>い</sup>って持ち帰ったが、あるとき彼の家へ遊びに行ったら、机のヒキダシへ蛇を飼<sup>か</sup>っていた。ある日、囚人墓地でボクサーが蛇を見つければ、飛びかかってシツポをつかんでぶら下げた。ぶら下げたとたん<sup>まむし</sup>に蝮と気がついて、彼は急に<sup>きょうふ</sup>恐怖のために殺気立って狂<sup>くる</sup>ったような真剣<sup>しんけん</sup>さで蛇をクルクルふりまわし始めたが、五分間も唸<sup>うな</sup>り声ひとつ立てずにふり廻<sup>まわ</sup>っていたものだ。それから蛇を大地へ叩<sup>たた</sup>きつけて、頭をふみつぶしたが、冗談<sup>じょうだん</sup>じゃないぜ、蝮にかまれて囚人墓地でオダブツなんて笑い話にもならねえ、と<sup>つぶや</sup>呟<sup>つぶや</sup>き



ながらこくめいに頭を踏ふみつぶしていたのを妙みょうに今もはつきり覚えている。

私はこの男にたのまれてほんやく翻訳をやったことがある。この男は中学時代から諸方の雑誌へボクシングの雑文を書いていたが、私にボクシング小説の翻訳をさせて「新青年」へのせた。「人心収攬しゅうらん術」というので、これは私の訳したもののなのである。原稿料げんこうりょうは一枚三円でお前に半分やると云っていたが、その後言を左右にして私に一文もくれなかった。私が後日物を書いて原稿料を貰もらうようになっても、一流の雑誌でも二円とかせいぜい二円五

十銭で、私が三円の稿料を貰ったのは文筆生活十五年ぐ  
らいの後のことであつた。純文学というものの稼かせぎは中  
学生の駄だぶん文の翻譯およに遠く及ばないのである。

私はこの不良少年の中学へ入学してから、漠ぼくぜん然と宗教  
にこがれていた。人の命令に服すことのできない生れつ  
きの私は、自分に命令してそれに服するよろこびが強い  
のかも知れない。しかし非常に漠然たるあこがれで、求  
道のきびしさにノスタルジイのようなものを感じていた  
のである。

およそ学校の規律に服すことのできない不良中学生が

小学校の代用教員になるといふのは変な話だが、しかし、少年多感の頃はまたそれなりに夢と抱負ほうふはあつて、第一、その頃の方が今の私よりも大人おとなであつた。私は今では世間なみの挨拶あいさつすらろくにできない人間になつたが、その頃は節度もあり、たしなみもあり、父兄などともつたいぶつて教育家然と話をしていたものだ。

今新潟にいがたで弁護士ぼんの伴純ぼんという人が、そのころは「改造」などへ物を書いており、夢想家むそうかで、青梅おうめの山奥やまおくへ掘立小屋ほったてをつくつて奥さんと原始生活をしていた。私も後日この小屋をかりて住んだことがあつたが、モモンガーなど

を弓で落して食っていたので、私が住んだときは小屋の中へ蛇がはいってきて、こまった。この伴氏が私が教員になるとき、こういうことを私に教えてくれた。人と話をするときには、始め、小さな声で語りだせ、というのだ。え、なんですか、と相手にきき耳をたてさせるようにして、まず相手をひきずるようにしたまえ、と云うのだ。

私の学校の地区に、伴氏の友人で藤田ふじたという、両手の指がおのおの三本ずつという畸形児きけいじで鯰なますばかり書いている風変りな日本画家がいる。一風変った境地をもっているから一度訪ねてごらんなさい、と紹しょうかいじよう介状をくれた

ので、訪ねてみたことがある。今日はただ挨拶にきただけだ、いずれゆつくり来るからと私が言うのに、いや、そんなことを云わずに、サイダーがあるから、ぜひ上れという。無理にすすめるので、それでは、と私が上ると、奥さんをよんで、オイ、サイダーを買ってこい、と言うので、これには面喰めんくらったものだ。



私が代用教員をしたところは、世田ヶ谷しもきたざわの下北沢とい

うところで、その頃は荏原郡えばらと云い、まったくの武蔵野むさしので、私が教員をやめてから、小田急ができて、ひらけたので、そのころは竹藪たけやぶだらけであった。本校は世田ヶ谷の町役場の隣となりにあるが、私のはその分校で、教室が三つしかない。学校の前にアワシマサマというお灸きゆうだかの有名な寺があり、学校の横に学用品やパンやアメダマを売る店が一軒けんある外ほかは四方はただ広茫こうぼうかぎりもない田園で、もとよりその頃はバスもない。今、井上友一郎の住んでるあたりがどうもその辺らしい気がするのだが、あんまり変りすぎて、もう見当がつかない。その頃は学

校の近所には農家すらなく、まったくただひろびろとした武蔵野で、一方に丘おかがつらなり、丘は竹藪と麦畑で、原始林もあつた。この原始林をマモリヤマ公園などと呼ばれていたが、公園どころか、ただの原始林で、私はここへよく子供をつれて行って遊ばせた。

私は五年生を受持うけもつたが、これが分校の最上級生で、男女混合の七十名ぐらいの組であるが、どうも本校で手に負えないのを分校へ押しおつけていたのではないかと思う。七十人のうち、二十人ぐらい、ともかく片仮名で自分の名前だけは書けるが、あとはコンニチハ一つ書くこ

とのできない子供がいる。二十人もいるのだ。このてあいは教室の中で喧嘩ばかりしており、兵隊が軍歌を唄つて外を通ると、授業中に窓からとびだして見物に行くのがある。この子供は兇暴で、異常児だ。アサリムキミ屋の子供だが、コレラが流行してアサリが売れなくなつたとき、俺のアサリがコレラでたまるけえ、とアサリをくって一家中コレラになり、子供が学校へくる道で米汁のような白いものを吐きだした。もっともみんな生命は助かったようである。

本当に可愛い子供は悪い子供の中にいる。子供はみ



んな可愛いものだが、本当の美しいたましい魂は悪い子供がもっているもので、あたたかい思いや郷愁きょうしゅうをもっている。こういう子供に無理に頭の痛くなる勉強を強しいることはないので、その温い心や郷愁の念を心棒に強く生きさせるといふような性格を育ててやる方がいい。私はそういう主義で、彼等が仮名も書けないことは意にしなかった。田中という牛乳屋の子供は朝晩自分で乳をしぼって、配達していたが、一年落第したそうので、年は外の子供より一つ多い。腕うでつぶしが強く外の子供をいじめるといふので、着任のとき、分教場の主任から特にその子供のことを注

意されたが、実は非常にいい子供だ。乳をしぼるところを見せってくれと云って遊びに行ったら躍りあがるように喜んで出てきて、時々人をいじめることもあったが、ドブ掃除だの物の運搬だの力仕事というと自分で引受けて、黙々と一人でやりとげてしまう。先生、オレは字は書けないから叱らないでよ。その代り、力仕事はなんでもするからね、と可愛いことを云って私にたのんだ。こんな可愛い子がどうして札つきだと言われるのか、第一、字が書けないということは咎むべきことではない。要は魂の問題だ。落第させるなどは論外である。

女の子には閉口した。五年生ぐらいになると、もう女で、中には生理的にすら女でないかと思われるのが二人いた。

私は始め学校の近くのこの辺でたった一軒の下宿屋へ住んだが、部屋数がいくつもないので、同宿だ。このへんに海外殖民しよくみんの実習的じしうてきの学校があつて、東北の田舎まるだしの農家出の生徒と同宿したが、奇妙きみような男で、あたたかい御飯ごはんは食べない。子供こどもの時ときから野良のら仕事しごとで冷飯ひやめしばかり食たつて育そつたので、あたたかい御飯はどうしても食たべる気きにならないと云いつて、さましてから食たっている。

ところが、この下宿の娘むすめが二十四五で、二十貫かんもあり  
 そうな大女だが、これが私に猛烈もうれつに惚ほれて、私の部屋へ  
 遊びにきて、まるでもうウワずつて、とりののぼせて、呂律ろれつ  
 が廻まわらないような、顔の造作がくずれて目尻めじりがとけるよ  
 うな、身体からだがそわそわと、全く落付おちつかなく喋しゃべったり、沈黙ちんもく  
 したり、ニヤニヤ笑ったり、いきなりこの突撃とつげきには私も  
 呆気あっけにとられたものだ。そして私の部屋へだけ自分で御  
 飯をたいて、いつもあたたかいのを持ってくるから、同  
 宿の猫舌ねこじた先生がわが身の宿命なげを嘆なげいたものである。この  
 娘の狂恋きょうれんぶりには下宿の老夫婦ふうふうも手の施ほどこす術すべがなく困

りきっていた様子であったが、私はそれ以上に困却こんきやくして、二十日ぐらいで引越ひっこした。同宿者があつては勉強が  
できないから、と云つて、引越しの決意を老夫婦に打ち  
開けると、そのホツとした様子は意外のほどで、また、  
私への感謝は全く私の予想もしないものだった。だから  
この老夫婦はそれ以来常に私を賞揚しょうようし口を極めてほめ  
たたえていたそうで、私にとっては思いもよらぬことで  
あつたが、ところがこの娘の一人が私の組の生徒で、  
これが誰だれよりマセた子だ。親が私をほめるのが心外で、  
私に面と向つて、お父さんやお母さんが先生をとてもほ

めるから変だという。先生はそんないい人じゃないと言  
うのだ。こういう女の子供たちは私が男の悪童を可愛が  
ってやるのが心外であり、嫉ねたましいのである。女の子の  
嫉妬しつと深さというものは二十の私の始めて見た意外であっ  
て、この対策にはほとほと困却したものだ。

私が引越したのは分教場の主任の家の二階であった。  
代田橋だいたばしにあつて、一里余の道だ。けれども分教場の子供  
達の半数はそれぐらい歩いて通つていて、私が学校へく  
るまでには生徒が三十人ぐらい一緒いっしょになつてしまふ。私  
は時に遅刻ちこくしたが、無理もねえよ、若いんだからな、ゆ

うべはどこへ泊とまってきたかね、などとニヤニヤしながら言うのがある。みんな家へ帰ると百ひやくしやう姓の手伝いをする子供だから、片仮名も書けないけれども、ませていた。

分教場の主任は教師の誰かを下宿させるのが内職の一つで、私の前には本校の長岡ながおかという代用教員が泊とまっていたが、ロシヤ文学の愛好者で、変り者であったが、蛙かえるデンカンという奇妙な持病があつて、蛙を見るとテンカンを起す。私のクラスが四年の時はこの先生に教わったのだが、生徒の一人がチヨークの箱の中へ蛙を入れておいた。それで先生、教室でヒツクリ返あわって泡ふを吹いてし

まったそうで、あの時はビツクリしたよ、と牛乳屋の落第生が言っていた。彼が蛙を入れたのかも知れぬ。お前だろう、入れたのは、と訊きいたら、そうでもないよ、とニヤニヤしていた。

この主任は六十ぐらいだが、精力絶倫ぜつりんで、四尺六寸という畸形的な背の低さだが、横にひろがって隆りゅうりゅう々たる筋骨、鼻髭はなひげで隠かくしているがミツクチであった。非常な癩癩かんしゃくもちで、だから小心なのであろうが、やたらに当りちらす。小使こづかいだの生徒には特別あたりちらすが、学務委員だの村の有力者にはお世辞たらたらで、癩癩を起す



と授業を一年受持の老人に押しつけて、有力者の家へ茶のみ話に行ってしまう。学校では彼のいない方を喜ぶので、授業を押しつけられても不平を言わなかった。腹が立つと女にようぼう房をブン殴なぐったり蹴けとばしたり、あげくに家をとびだして、雑木林ぞうきばやしや竹藪へは行って、木の幹や竹の木を杖つえでメチャクチャに殴っている。それはまったく気違いであったが、大変な力で、手が痛くないのか、五分間ぐらいも、エイエイエイ、ヤアヤアヤアと気合をかけて夢中になぐっている。

この節の若者は、とか、青二才が、とか口癖くちぐせであった

が、私は当時まったく超然居士ちやうぜんこじで、怒らぬこと、悲しまぬこと、憎にくまぬこと、喜こばぬこと、つまり行雲流水のごとく生きようという心こころ掛がけであるからビクともしない。もつとも私に怒ると転居されて下宿料が上らなくなる怖おそれがあるから、そういうところは抜ぬ目めがなくて、私にだけはほとんど当りちらさぬ。先生は全部で五人で、一年の山門老人、二年の福原女先生、三年の石毛女先生、この山門老人がまた超然居士で六十五だかで、麻布あざぶからワラジをはいて歩いて通ってくる。娘には市内で先生をさせ、結婚けっこんしたがっているのださうだが、ドツコイ、許さ

れぬ、もうしばらくは家計を助けてもらわねばならぬ、毎日もめているから毎日私達にその話をして、イヤハヤ色気づいてウズウズしておりますよ、アツハツハと言っている。子供が十人ちかいから生活が大変で、毎晩一合の酒に人生を托たくしている。主任は酒をのまない。

小学校の先生には道德観の奇怪きかいな顛倒てんとうがある。つまり教育者というものは人の師たるもので人の批難を受けないうよう自戒じかいの生活をしているが、世間一般いっぽんの人間はそうではなく、したい放題の悪行に耽ふけっているときめてしまつて、だから俺達おれだつてこれぐらいはよかろうと悪いこ

とをやる。当人は世間の人はもつと悪いことをしている、俺のやるのは大したことはないと思いきこんでいるのだが、実は世間の人にはとてもやれないような悪あくどい事をやるのである。農村にもこの傾向けいこうがあつて、都会の人間は悪い、彼等は常に悪いことをしている、だから俺たちだって少しぐらいはと考えると、実は都会の人よりも悪どいことを行う。この傾向は宗教家にもある。自主的に思いまた行うのではなく他をかえりみ顧かへりみて思いまた行うことがすでにいけないのだが、他を顧かへりみるのが妄想的もうそうてきなので、なおひどい。先生達が人間世界を悪きたなく汚きたなく解釈妄想しすぎて

いるので、私は驚おどろいたものであった。

私が辞令をもらって始めて本校を訪ねたとき、あなたの勤めるのは分校の方だからと、分校の方に住んでいる女の先生が送ってくれた。これが驚くべき美しい人なのである。こんな美しい女の人はそのときまで私は見たことがなかった。目がさめるといふ美しさは実在するものだと思った。二十七の独身の人で、生涯独身で暮くらす考えだということを入づてにきいたが、何かしつかりした信念があるのか、非常に高貴で、慎つつしみ深く、親切で、女先生にありがちな中性タイプと違い、女らしい人であ

る。私はひそかに非常にあこがれを寄せたものだ。本校と分校とほとんど交渉こうしやうがないので、それつきり話を交かわす機会もなかったが、その後数年間、私はこの人の面影おもかげを高貴なものにだきしめていた。

村のある金持、もう相当な年配の男だそうだが、女房が死んでその後釜あとがまにこの女の先生を貰いたいという。これを分校の主任にたのんだものだ。何百円とか何千円とかの謝礼という約束やくそくの由よしで、そのときのこの主任の東奔とうほん西走、授業をうつつちやらかして馳かけ廻まわって、なにしろ御本尊の女先生が全然結婚自体に意志がないので無理な話

だ。毎日八ツ当りで、その一二ヶ月というもの、そわそわしたこの男の粗暴そぼうというより狂暴にちかい痼癩は大変だった。

私は行雲流水を志していたから、別段女の先生に愛を告白しようとか、結婚したいなどは考えず、ただその面影を大切なものに抱だきしめていたが、この主任の暗躍あんやくをきいたときには、美しい人のまぼろしがこんな汚らしたてまえい結婚でつぶされてはと大変不安で、行雲流水の建前にもかかわらず、主任をひそかに憎んだりした。

石毛先生は憲兵曹長そうちようだかの奥さんで、実に冷めたい

中性的な人であったが、福原先生はよいオバサンであった。もう三十五六であったろうが、なりふり構わず生徒のために献身けんしんするというたちで、教師というよりは保母ほぼのような天性の人だ。だから独身でも中性的な悪さはなく、高い理想などはなかったが、善良な人であった。例の高貴な先生の親友で、偶像ぐうぞう的な尊敬をよせていることも、私には快かった。多くの女先生は嫉妬つらしていたのである。私が先生をやめたとき、お別れするのは辛いつらが、先生などに終ってはいけない、本当によいことです、と云って、喜んでくれて、お別れの酒宴しゅえんをひらいてうんと



こさ御馳走ごちそうをこしらえてくれた。私はしかし先生で終ることのできない自分の野心が悲しいと思っていた。なぜ身を捧まかげることが出来ないのだろうか？

私は放課後、教員室にいつまでも居残っていることが好きであった。生徒がいなくなり、外の先生も帰ったあと、私一人だけジツと物思いに耽ひたっている。音といえば柱時計の音だけである。あの喧けん噪そうな校庭に人影も物音もなくなるといものが妙に静せい寂じやくをきわだててくれ、変に空虚くうきよで、自分というものがどこかへ無くなったような放心を感じる。私はそうして放心していると、柱時計の陰

などから、ヤアと云って私が首をだすような幻想を感じた。ふと気がつくとき、オイ、どうした、私の横に私が立っていて、私に話しかけたような気がするのである。私はその朦朧たる放心の状態が好きで、その代り、私は時々ふとそこに立っている私に話しかけて、どやされることがあった。オイ、満足しすぎちゃいけないぜ、と私を睨むのだ。

「満足はいけないのか」

「ああ、いけない。苦しまなければならぬ。できるだけ自分を苦しめなければならぬ」

「なんのために？」

「それはただ苦しむこと自身がその解答を示すだろうさ。人間の尊さは自分を苦しめるところにあるのさ。満足は誰でも好むよ。けだものでもね」

本当だろうかと思つた。私はともかくたしかに満足には淫いんしていた。私はまったく行雲流水にやや近くなつて、怒ることも、喜ぶことも、悲しむことも、すくなくなり、二十のくせに、五十六十の諸先生方よりも、私の方が落付と老成と悟りさとをもっているようだった。私はなべて所有を欲しなかつた。魂の限定されることを欲し

なかつたからだ。私は夏も冬も同じ洋服を着、本は読み終ると人にやり、余分の所有品は着代えのシャツとフンドシだけで、あるとき私を訪ねてきた父兄の口からあの先生は洋服と同じようにフンドシを壁かべにぶらさげておくという笑い話がひろまり、へえ、そういうことは人の習慣にないことなのか、と私の方がびっくりしたものだ。フンドシを壁にぶら下げておくのは私の整頓せいとんの方法で、私には所蔵という精神がなかつたので、押入おしいれは無用であった。所蔵していたものといえは高貴な女先生の幻まぼろしで、私がそのころバイブルを読んだのは、この人の面影から

聖母マリヤというものを空想したからであつた。しかし私は、あこがれてはいたが、恋こいしてはいなかつた。恋愛れんあいという平衡へいこうを失つた精神はいささかも感じなかつたので、せめて同じこの分校で机を並べて仕事ができたらいいになアと、私の欲する最大のことはそれだけであつた。この人の面影は今ももう私の胸にはない。顔も思いだすことができず、姓名せいめいすら記憶きおくにないのである。



私はそのころ太陽というものに生命を感じていた。私はふりそそぐ陽射しひざの中に無数の光りかがやく泡、エーテルの波を見ることができたものだ。私は青空と光を眺めるだけで、もう幸福であった。麦畑を渡る風と光の香気こうきの中で、私は至高の歓喜かんきを感じていた。

雨の日は雨の一粒一粒つぶの中にも、嵐あらしの日は狂い叫ぶさけその音の中にも私はなつかしい命を見つめることができた。樹々の葉にも、鳥にも、虫にも、そしてあの流れる雲にも、私は常に私の心と語り合う親しい命を感じつつづけていた。酒を飲まねばならぬ何の理由もなかったので、

私は酒を好まなかった。女の先生の幻だけでみたされており、女の肉体も必要ではなかった。夜は疲れて熟じゆくすい睡すいした。

私と自然との間から次第に距離きよりが失われ、私の感官は自然の感かん触しよくとその生命によつて充みたされている。私はそれに直接不安ではなかったが、やっぱり麦畑の丘や原始林の木暗い下を充ちたりて歩いているとき、ふと私に話かける私の姿を木の奥や木の繁しげみの上や丘の土肌つちはだの上に見るのであった。彼等は常に静かであった。言葉も冷静で、やわらかかった。彼等はいつも私にこう話しかけ

る。君、不幸にならなければいけないぜ。うんと不幸に、ね。そして、苦しむのだ。不幸と苦しみが人間の魂のふるさとなのだから、と。

だが私は何事によつて苦しむべきか知らなかった。私には肉体の慾望よくぼうも少なかった。苦しむとは、いったい、何が苦しむのだろう。私は不幸を空想した。貧乏びんぼう、病氣、失恋、野心の挫折ざせつ、老衰ろうすい、不知、反目、絶望。私は充ち足りているのだ。不幸を手探りしても、その影すらも捉とらえることはできない。叱責しつせきを怖れる悪童の心のせつなさも、私にとってははなつかしい現実であつた。不幸とは何



物であろうか。

しかし私はふと現れて私に話しかける私の影に次第にあっぱく 圧迫されていた。私は娼家しょうかへ行ってみようか。そして最も不潔なひどい病気にでもなってみたらいいのだろうか。と考えてみたりした。

私のクラスに鈴木という女の子がいた。この子の姉は実の父と夫婦の関係を結んでいるという隠れもない話であつた。そういう家自体の罪悪の暗さは、この子の性格の上にも陰鬱な影となつて落ちており、友達と話をしていることすらめつたになく、つぎうき 浮々と遊んでいることなど

は全くない。いつも片隅かたすみにしよんぼりしており、話しかけるとかすかに笑うだけなのである。この子からは肉体が感じられなかった。

私は不幸ということについて戸惑とまどいするたびに、この十二の陰鬱な娘の姿を思い出した。

石津という娘と、山田という娘がいた。私はこの二人は生理的にももう女ではないのだろうかと時々疑ったものだが、石津の方は色っぽくて私に話しかける時などは媚こびるような色気があったが、そのくせ他の女生徒にくらべると、嫉妬心だの意地の悪さなどは一番すくなく、

ただやがてもてあそ弄ばばれるふくよかな肉体だけしかないような気がする。これも余り友達などはない方で、女の子にありがちな、親友と徒党的な垣かきをつくるようなことが性格的に稀薄きはくなようだ。そのくせ明るくて、いつも笑ってポカンと口をあけて何かを眺めているような顔だった。

山田の方は豆腐屋とうふやの子で、しかし豆腐屋の実子ではなく、女房の連れ子なのである。その妹と弟は豆腐屋の実子であった。この娘は仮名で名前だけしか書けない一人で、女の子の中で最も腕力わんりよくが強い。男の子と対等で喧嘩をして、これに勝つ男はすくないので、身体も大きか

ったが、いつも口をキツと結んで、顔付はむしろ利巧そうに見える。陰性というのとも違う、何か思いつめているようで、明るさがなく、全然友達がない。喋ることしゃべに喜びを感じることはないように人と語り合うことがすくなく、それでも沈黙がちに遊戯ゆうぎの中へ加わって極めて野性的にとび廻っている。笑うことなどはなく、面白くもなさそうだが、しかし跳ね廻っている姿は他の子供に比べると格段にその描きだす線が大きく荒々あらあらしく、まったく野獣やじゆうのような力がこもっていて、野性がみちっていた。そのくせ色気が乏しいとぼ。大胆不敵だいたんのようだが、実際は、

私は他の小さなたわいもない女生徒の方に実はもっと本質的な女自体の不敵さを見出していたもので、嫉妬心だの意地の悪さだの女的なものが少いのである。今は早熟のごとくでも、すべてこれらの子供達が大人になったときには、結局この娘の方が最後に女から取り残され、あらゆる同性に敗北するのではないかと私は思った。

この娘の母親がある一夜私を訪ねてきたことがある。この娘の特別の事情、つまり、何人かの妹弟の中でこの娘だけが実子でないために性格がひねくれていることを説明して、父母の方では別に差別はしていないのだから、

もつと父に打ちとけるように娘にさとしてくれというのだ。この母親は淫奔いんぽんな女だという評判で、まったく見るからに淫奔らしい三十そこそこの女であった。いや、ひねくれてはおりません、と私は答えた。ひねくれたように見えるだけです。素直な心と、正しいものをあやまたずに認めてそれを受け入れる立派な素質を持っています。私の説教などは不要です。問題はあなた方の本当の愛情です。私がいちばん心配なのは、あの娘は、人に愛される素質がすくない。女として愛される素質がすくない。ひねくれのせいではないのです。あの娘は人に愛さ

れたことがないのでありませんか。まず親に、あなた方に愛されたことがないのでありませんか。私に説教してくれなんて、とんでもないお門かどちが違いですよ。あなたが、あなたの胸にきいてごらんなさい。

この母親はちつとも表情を表わさずに、私の言葉をとりとめのない漠然ぼくぜんたる顔付できいていた。これも仮名で名前しか書けない一人だろうと私は思った。ただ、子供とはあべこべに、徹頭てつとうてつ徹尾てつび色つぽく、肉慾的だ。最も女であった。その淫奔な動物性が、娘の野性と共通しているだけだった。娘はおおがら大柄であるのに、母親はひどく小柄

であつた。顔はどちらにも美人の部類である。二三分だま  
つていたが、やがてひどく馴なれ馴なれしく世間話をして歸  
つて行つた。

鈴木と並べて石津と山田を私は思いだす習慣になつて  
いた。この三人の未来には不幸のみが待ち構えているよ  
うに思われてならない。私は不幸というものを、私自身  
についてでなしに、生徒の影の上からまず見凝みつめはじめ  
ていたのだ。その不幸とは愛されないということだ。尊  
重されないということだ。石津の場合はまだオモチヤに  
され、私はやがて娼婦となつて暮している喜き怒ど哀あ楽らくの稀



薄な、たわいもない肉塊にっかいを想像した。私は実際の娼家も娼婦も知らなかったが、まったく小説などから得たものの中で現実を組み立てていたのである。しかし私の予感は今でも当たっていたように考えている。

石津は貧しい家の娘で、その身体にはいっぱい虱しらみがたかっていた。外の子供がそう云って冷やかす。キリリと怒るような顔になるが、やがて又たわいもない笑い顔になってしまふ。善良というよりも愚おろかという魂が感じられる。読み書きはともかく出来て、中くらいの成績なのだが、人生の行路では、仮名も知らない女よりも処世

に疎うとくて、要するに本当の生長がないような愚な魂がのぞけて見えるのだ。そのくせ、ひどく色っぽい。ただ、それだけだ。

私は先生をやめるとき、この娘を女中に譲ゆずり受けて連れて行こうかと思った。そうして、やがて自然の結果が二人の肉体を結びつけたら、結婚してもいいと思った。まったくこれは奇妙な妄想であつた。私は今でも白痴はくちてき的な女に妙に惹ひかれるのだが、これがその現実における首はじまりで、私は恋情とか、胸の火だとか、そういうものは自覚せず、極めて冷静に、一人の少女とやがて結婚して

もいいと考え耽っていたのである。

私は高貴な女先生の顔はもうその輪郭りんかくすらも全く忘れて思い描くよしもないが、この三人の少女の顔は今も生々なまなましく記憶している。石津はオモチャにされ、踏みつけられ、虐しいたげられても、いつもたわいもなく楽天的なような気がするのだが、むろん現実ではそんなはずはない。虱たかりと云われて、やっぱり一瞬いつしゆんはキリリとまなじりを決するので、踏みしだかれて、路上の馬糞ばふんのように喘あえいでいる姿も思う。私の予感よかんは当っていて、その後娼家の娼婦に接してみると、こんな風なたわいもない

楽天家にしばしばめぐりあつたものである。



私は近頃、誰しも人は少年から大人になる一期間、大人よりも老成する時があるのではないかと考えるようになった。

近頃私のところへ時々訪ねてくる二人の青年がいる。二十二だ。彼等は昔は右翼団体うよくに属していた。こちこちの国粹主義者こくすいだが、今は人間の本当の生き方ということ

考えているようである。この青年達は私の「墮落論だらく」とか「淪落論りんらく」がなんとなく本当の言葉であるようにも感じて、いるらしいが、その激しさについてこれないのである。彼等は何よりも節度を尊んでいる。

やっぱり戦争から帰ってきたばかりの若い詩人と特攻とっこうくずれの編輯者へんしゅうしやがいる。彼等は私の家へ二三日泊りとま、ガチャガチャ食事をつくってくれたり、そういう彼等には全く戦陣せんじんの影がある。まったく野戦おうえんの状態じょうたいで、野放しにされた荒々しい野性が横溢おういつしているのである。しかし彼等の魂にはやはり驚くべき節度があつて、つまり彼等

はみんな高貴な女先生の面影を胸にだきしめているのだ。この連中も二十二だ。彼等にはまだ本当の肉体の生活が始まっていない。彼等の精神が肉体自体に苦しめられる年齢ねんれいの発育までできていないのだろう。この時期の青年は、四十五十の大人よりも、むしろ老成している。彼等の節度は自然のもので、大人達の節度のように強いて歪ゆがめられ、つくりあげられたものではない。あらゆる人間がある期間はカンジダなのだと思ふ。それから墮おちるのだ。ところが、肉体の墮ちると共に、魂の純潔まで多くは失うのではないか。

私は後年ボルテールのカンジダを読んで苦笑したものだ。だが、私が先生をしているとき、不幸と苦しみの漠然たる志向に追われ、その実私には不幸や苦しみを空想的にしか捉<sup>とら</sup>えることができない。そのとき私は自分に不幸を与える方法として、娼家へ行くこと、そして最も厭<sup>いや</sup>な最も汚らしい病気になつては、と考<sup>か</sup>えたものだ。この思<sup>し</sup>いつきは妙に根強く私の頭に絡<sup>から</sup>みついていたものである。別に深い意味はない。外に不幸とはどんなものか想像することができなかつたせいだろう。

私は教員をしている間、なべて勤める人の処世上の苦

痛、つまり上役との衝突しょうとつとか、いじめられるとか、党派まさつ的な摩擦とか、そういうものに苦しめられる機会がなかった。先生の数五人しかない。党派も有りようがない。それに分教場のことで、主任といっても校長とは違うから、そう責任は感じておらず、第一非常に無責任な、教育事業などに何の情熱もない男だ。自分自身が教室をほったらかして、有力者の縁談えんだんなどで東奔西走しているから、教育という仕事については誰に向っても一言半句も言うことができないので、私は音楽とソロバンができないから、そういうものをぬきにして勝手な時間表をつ



くつても文句はいわず、ただ稀まれに、有力者の子供を大事にしてくれということだけ、ほのめかした。しかし私はそういうことにこだわる必要はなかったので、私は子供をみんな可愛がっていたから、それ以上どうする必要も感じていなかった。

特に主任が私に言ったのは荻原おぎわらという地主の子供で、この地主は学務委員であった。この子はしかし本来よい子供で、時々いたずらをして私に怒おこられたが、怒られる理由をよく知っているので、私に怒られて許されるとかえって安心するのであった。あるとき、この子供が、先

生は僕ぼくばかり叱しかる、と行って泣きだした。そうじゃない。本当は私あまに甘あまえている我がままなのだ。へえ、そうかい。俺おれはお前まへだけ特別叱しかるか。そう云って私が笑いだしたら、すぐ泣きやんで自分も笑いだした。私と子供とのこのううつなかりは、主任には分らなかつた。

子供は大人と同じように、ずるい。牛乳屋の落第生なども、とてもずるいにはずるいけれども、同時に人のために甘んじて犠ぎせい牲せいになるような正しい勇氣も一緒に住んでいるので、つまり大人と違うのは、正しい勇氣の分量が多いという点だけだ。ずるさは仕方がない。ずるさが

悪徳ではないので、同時に存している正しい勇気を失うことがいけないのだと私は思った。

ある放課後、生徒も帰り、先生も帰り、私一人で職員室に朦朧もうろうとしてしていると、外から窓のガラスをコツコツ叩たたく者がある。見ると、主任だ。

主任は帰る道に有力者の家へ寄った。すると子供が泣いて帰ってきて、先生に叱られたという。お父さんが学務委員などをして威張いばっているから、先生が俺を憎むのだ。お父さんの馬鹿野郎ばかやろう、と云って、大変な暴れ方で手がつけられない。いったい、どうして、叱ったのだ、と

言うのである。

あいにく私はその日はその子供を叱ってはいないのである。しかし子供のやることには必ず裏側に悲しい意味があるので、決して表面の事柄ことだけで判断してはいけな  
いものだ。そうですか。大したことではないけれど、叱  
らねばならないことがあったから叱っただけです、じゃ、  
君、と、主任はいやらしい笑い方をして、君、ちよつと、  
出掛でけて行って釈明してくれたまえ。長い物にはまかれ  
ろというから、仕方がないさ、へっへ、という。主任は  
へっへという笑い方をしばしばつけたす男であった。

「僕に行く必要がないです。先生はお帰りの道順でしようから、子供に、子供にだけです、ここへ来るように言っていただけませんか」

「そうかい。しかし、君、あんまり子供を叱っちゃ、いけないよ」

「ええ、まあ、僕の子供のことは僕にまかせておいて下さい」

「そうかい。しかし、お手やわらかに頼むよ、有力者の子供は特別にね」

と、その日の主任は虫の居どころのせいか、案外アツ

サリぴよこびよこ歩いて行った。私は今まで忘れていたが、彼はほんの少しだがビツコで、ちよつと尻しりを横つちよへ突つきだすようにぴよこ歩くのである。だが、その足はひどく速い。

まもなく子供はてれて笑いながらやってきて、先生と窓の外からよんで、隠かくれている。私はよく叱るけれども、この子供が大好きなのである。その親愛はこの子供には良く通じていた。

「どうして親父おやじをこまらしたんだ」  
「だって、癩しやくだもの」

「本当のことを教えろよ。学校から帰る道に、なにか、やっただらう」

子供の胸にひめられている苦惱くのおうは、大人と同様に、むしろそれよりもひたむきに、深刻なのである。その原因が幼稚ようちであるといつて、苦惱自体の深さを原因の幼稚さで片づけてはいけない。そういう自責や苦惱の深さは七ツの子供も四十の男も変りのあるものではない。

彼は泣きだした。彼は学校の隣となりの文房具屋ぶんぼうぐやで店先の鉛筆えんぴつを盗ぬすんだのである。牛乳屋の落第生しつぱいにおどかさされて、たぶん何か、おどかさされる弱い尻尾しつぽがあつたのだらう、

そういうことは立入ってきいてやらない方がいいよう  
だ、ともかく仕方なしに盗んだのである。お前の名前な  
ど言わずに鉛筆の代金は払はらっておいてやるから心配する  
なと云うと、喜んで帰って行った。その数日後、誰もい  
ないのを見すましてソツと教員室へやってきて、二三十  
銭の金をとりだして、先生、払ってくれた？　とききに  
きた。

牛乳屋の落第生は悪いことがバレて叱られそうな気配  
が近づいているのを察すると、ひどくマメマメしく働き  
だすのである。掃除そうじ当番などを自分で引受けて、ガラス



などまでセツセと拭<sup>ふ</sup>いたり、先生、便所がいつぱいだからくんでやろうか、そんなことできるのか、俺は働くことはなんでもできるよ、そうか、汲<sup>く</sup>んだものをどこへ持っていくのだ。裏の川へ流しちゃうよ、無茶言うな、ザツとこういうあんばいなのである。その時もマメマメしくやりだしたので、私はおかしくて仕方がない。

私が彼の方へ歩いて行くと、彼はにわかには後じさりして、

「先生、叱<sup>ち</sup>つちや、いや」

彼は真剣に耳を押<sup>お</sup>えて目をとじてしまった。

「ああ、叱らない」

「かんべんしてくれ」

「かんべんしてやる。これからは人をそそのかして物を盗ませたりしちやいけないよ。どうしても悪いことをせぬにいられなかつたら、人を使わずに、自分一人でやれ。

善いことも悪いことも自分一人でやるんだ」

彼はいつもウンウンと云って、きいているのである。

こういう職業は、もし、たとえば少年達へのお説教というものを、自分自身の生き方として考えるなら、とても空虚で、つづけられるものではない。そのころは、し

かし私は自信をもっていたものだ。今はとてもこんな風に子供にお説教などはできない。あの頃の私はまったく自然というものの感触に溺れ、太陽の讃歌のようなものが常に魂から唄われ流れでていた。私は臆面もなく老成しきって、そういう老成の実際の空虚というものを、さとらずにいた。さとらずに、いられたのである。

私が教員をやめるときは、ずいぶん迷った。なぜ、やめなければならぬのか。私は仏教を勉強して、坊主になろうと思ったのだが、それは「さとり」というものへのあこがれ、その求道のための厳しさに対する郷愁めく

ものへのあこがれであった。教員という生活に同じものが生かされぬはずはない。私はそう思ったので、さとりへのあこがれなどというけれども、所詮しよせんめいよく名誉慾いよくというものがあつてのこと、私はそういう自分の卑いやしさを嘆なげいたものであつた。私は一向希望に燃えていなかつた。私のあこがれは「世を捨てる」という形態の上にあつたので、そして内心は世を捨てることが不安であり、正しい希望を抛棄ほうきしている自覚と不安、悔恨かいこんと絶望をすでに感じつづけていたのである。まだ足りない。何もかも、すべてを捨てよう。そうしたら、どうにかなるのではない

か。私は気違いじみたヤケクソの気持で、捨てる、捨てる、捨てる、捨てる、何でも構わず、ただひたすらに捨てることを急ごうとしている自分を見つめていた。自殺が生きたい手段の一つであると同様に、捨てるというヤケクソの志向が実は青春の**あしおと**の登音のひとつにすぎないことを、やっぱり感じつつづけていた。私は少年時代から小説家になりたかったのだ。だがその才能がないと思いきんでいたので、そういう正しい希望へのてんからの**あきら**諦めが、底に働いていたこともあったろう。

教員時代の変に充ち足りた一年間というものは、私の

歴史の中で、私自身でないような、思いだすたびに嘘うその  
ような変に白々しい気持がするのである。

（昭和二十一年一月）







日本文学電子図書館

---

「坂口安吾 ちくま日本文学009」

著 者：坂口安吾

制作者：宮澤一郎

出版社：筑摩書房

2008年9月25日 第2刷発行

---



日本文学電子図書館